2012 年 11 月 14 日放送

「性感染症予防のための若者への啓発－医療者の果たす役割－」

神戸大学大学院　腎泌尿器科学教授
荒川　創一

はじめに

性感染症は予防できます。そして、性感染症予防は、次代を担う若者において、最も重要であります。健康な子供を産み育み世の中に送り出してくれなくてはならないからです。若者を性感染症から守るにはどうすればよいのでしょうか。日本性感染症学会は日本思春期学会との共作により、中高生指導用の性感染症予防啓発標準スライド（パワーポイント）を作成し、日本性感染症学会では全学会員に CD を配布しました。この CD には、日本性感染症学会雑誌の性感染症病変図説（写真）（抜粋）も添付されています。日本思春期学会では、学会員がホームページからアクセスできるようになっています。私は、このスライド作成に携わった者の一人として、また、毎年、近隣の高等学校に出向いて高校 1 年生を対象の中心として、予防啓発授業を担当している立場から、医療者が誰でも知っておくべき性感染症予防の 10 代の若者への教育方策について述べてみたいとおもいます。

思春期の若者への対処

まず、思春期の若者の性欲の目覚めにどう対処するかということについて述べます。

教育の目的は理性と知性を磨くことにより、将来社会に一人前の大人として立って行ける人間を形成することが第一義でありましょう。しかし、同時に豊かな感情を育て、喜怒哀楽を理解しまたそれらを自己コントロールできる能力開発も重要であります。一方、ヒトも動物の仲間であり、食欲に始まるコントロールの困難ないわゆる「本能」を持ち合わせています。性欲もまた、コントロールの域を超えたところにともすれば性への暴走が生まれるのが世の常でもあります。教育の場である学校で性欲の目覚めを客観的に教え、直情行為に走らず、いかにそのエネルギーを他に転じ、学業やスポーツにその精力を傾けられるようにするかということは、思春期を迎えた男女、特に能動的性の主

体である男子の抱えた課題のひとつであり、古今東西のこの普遍的命題に教育がどこまで手をさしのべられるかということにも模範回答はないかもしれません。しかし、ここにひとつのブレーキが提示され得ます。それが望まざる妊娠というリスクであり、性感染症というリスクであります。教育者や医療者は、彼ら思春期の中に身を置く若者に必然的に起こってくる性欲が行為までに至った際に起こり得るいわば有害事象を教え、熱く沸く感情に冷や水をかけることをある程度積極的に行わざるを得ません。それは決して脅しというものではなく、この現代すなわち科学的社会では常識として伝達すべき教育の単元であると言えます。すなわち、これは性教育の中の性感染症予防教育というべき一単元と捉えるべきであります。

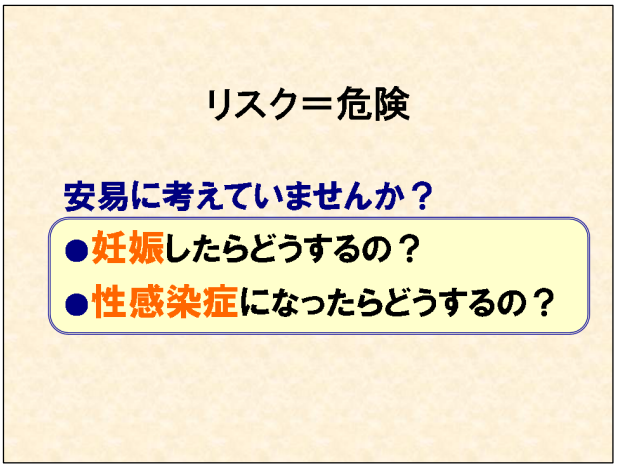
性感染症予防教育

では具体的な性感染症予防教育における話の進め方について、高校１年生を対象の中心に想定してご説明いたします。

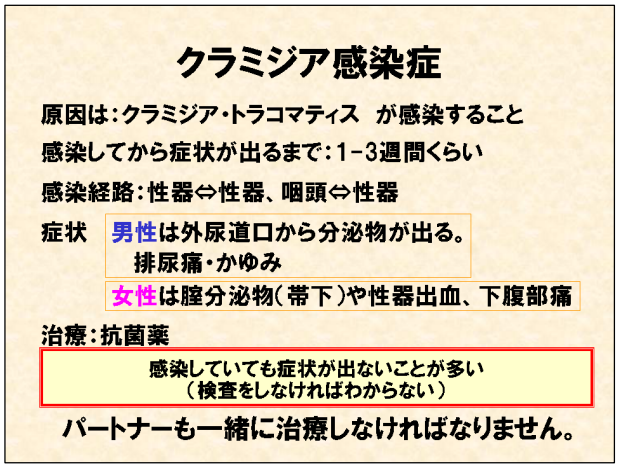
冒頭に申し上げました、日本性感染症学会と日本思春期学会との共作スライドでは、まず、授業対象となる中高生にこう語りかけます。

君たちが今、人生のどういう時期にいるのかを理解しよう。思春期には体も心も変わること、特に男女の体型が変わってくることなどを具体的に示します。

そして、性欲が起こってきた場合、性交渉の有害事象、授業ではこれをリスクという言葉で説明し、望まざる妊娠と性感染症という、二つのことを頭に浮かべて、冷静に対応しましょうと話を進めます。

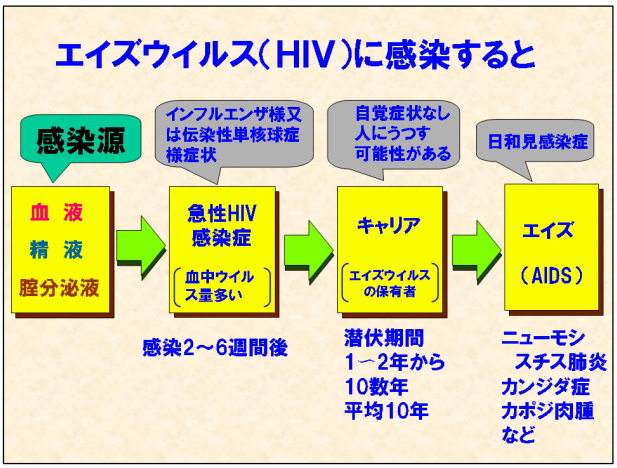


ここから、性感染症の具体的説明に入っていきます。たとえば、性器クラミジア感染症の症状や感染経路などを解説します。無自覚に進展して女子では不妊症や子宮外妊娠の原因となることや早産、胎児・新生児に垂直感染を起こすことの問題に話を進めます。男子では精巣上体炎まで進むとやはりおおごとになるということについて説明します。

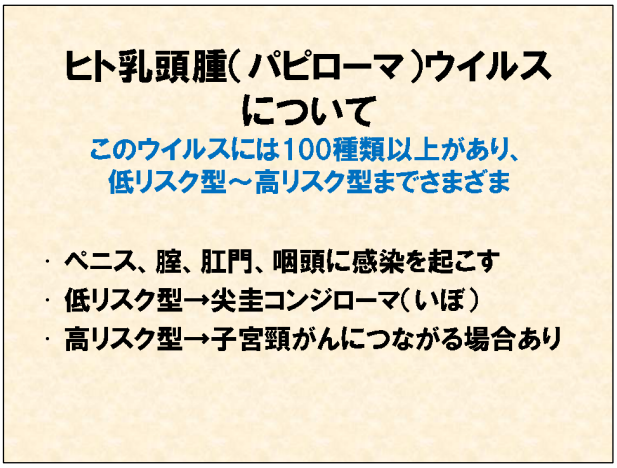


一方で無症候性感染が多いことへの警鐘が重要です。ここでもクラミジア感染などを例に挙げて、症状がないまま性交渉で相手に伝播していく問題を伝えます。

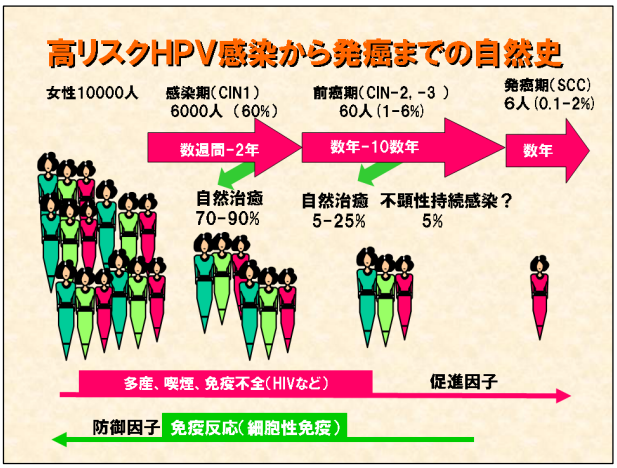
次にエイズの問題に進みます。この感染症の本態や経過を理解させ、日本で年々、HIV 感染症・エイズ患者が増加していることについてデータをもとに、性感染症としてのエイズの問題について説明します。



さらにヒト乳頭腫ウイルスすなわち HPV 感染と子宮頸癌との関係についての説明をします。20 代の若年女性の子宮頸癌が増加傾向にあることを認識してもらい、その背景に高リスク型 HPV 感染が存在すること、すなわち、若い年代での子宮頸癌の多くも性感染症の延長線上にあることを解説いたします。



安全なセックスいわゆるセーファーセックスのために相手は信頼できる一人にということが言われますが、これは成人してからあるいは社会人となって、物事がもっと見極められるようになってからの心構えです。自分の性パートナーが一人であれば安心かといえば決してそうではなく、相手が一人でも、その相手には別のセックスパートナーがいれば、背後に性のネットワークが存在し得、引いては、自分が感染する懸念があるということを分かりやすい図を用いて説明します。



どうすればいいのか

では、どうすればいいのかという回答を中高生に与える必要があります。とにかく性感染症は予防が第一であることを強調します。まず性感染症は性行為を取らなければうつらないということ。ここでいう性行為とは、オーラルセックスなども含むということ

も教えなければなりません。要するにNo sexは重要なひとつの予防であるということ。敢えてセックスするなら必ずコンドーム着用を。コンドームの正しい付け方は常識として教えます。もし、あえてセックスをするのなら、必ずコンドームを使うこと、そしてピルなどの適切な使用も、医療機関で相談すること。でもこれにはお金もかかるよねと続けます。コンドームなどを使わずにセックスをしてもよいのは、互いに感染がないとき、愛する相手との間に子供を産み、育てることができ、しかも相手もそれを望みかつ、それができる条件が整っているときだけです。という結論に導きます。そしてもし、セックスに走ってしまって感染している心配があるなら、保健所で無料・匿名でHIVの検査などが受けられることを伝えます。

授業の最後に中高生へのメッセージとして、セックスすなわち性交を焦る必要はない。まずは友人間において、そして男女間において、心のコミュニケーションを大切に育てていきましょう。ということで話を締めくくります。

この思春期中高生徒への性感染症予防教育は大人で性感染症を発症して受診してきた患者の教育にも通じます。

じゃあ、どうすればよいのか

- **予防することが一番重要。**
  - ・セックスしないことも予防の一つ
  - ・コンドームを使用することが予防の一つ
- **感染しているのかを確認**
  - ・病院、保健所などで検査を受ける。
- **感染していたらきちんと治療をする。**
  - ・パートナーと共に治療すること。
- **雑誌のガセネタなどに振り回されないで。**

もし、あえてセックスをするのなら

- **必ずコンドームを使うこと(ピルなどの適切な使用も、医療機関で相談すること)。**
- **コンドームなどを使わずにセックスをしてもよいのは、互いに感染がないとき、愛する相手との間に子供を産み、育てることができ、しかも相手もそれを望みかつ、それができる条件が整っているときだけです。**

保健所での検査

- **全国の保健所や保健福祉部で、無料・匿名で、エイズの検査等が受けられます。(少し採血するだけ)**
- **自治体によっては、土曜日等に、町の繁華街のビルの一室で、即日検査(その日のうちに結果がわかる)を行っているところもあります。**

おわりに

今日のお話をまとめますと、性感染症としてのHIV感染症の着実な増加などの現状に照らし、中高生への性感染症の正確な知識の伝達は社会的に見て、非常に重要な課題であり、あらゆる医療者がそのノウハウをある程度知っておくべきということをまず認識していただきたいと思います。日本性感染症学会では性感染症認定医および認定士制度を2009年度に発足させました。すでに270名の認定医が誕生していますが、認定士が

未だ 12 名と少ない現状です。認定士には看護師、助産師、保健師、薬剤師、臨床検査技師、そして学校教諭などの職種の学会会員が一定の条件を満たし申請・手続きをすれば学会から認定証が発行されます。今後、日本性感染症学会会員となっていただくこれら職種が増え、認定士の応募が増え、増員され、日本各地区で、中高生への性感染症教育の推進を期待するものであります。少子高齢化社会の中にあって、性感染症は日本民族にとっては脅威です。すなわち、クラミジア→不妊、ＨＰＶ→子宮頸癌など、少子社会にさらにネガティブな要素をもたらす、無症候性感染の怖さを、もっと、社会が理解するべきであります。10 代半ばでの学校現場における教育が、最大の防波堤であり、教育現場と医療者の協調が必要です。日本性感染学会が、その橋渡し役を担い、認定士制度等の意義を深め、多くの医療者の手によって標準教育用スライドが活用されることも期待するものです。

日本性感染症学会の下記URLから、認定医制度、認定士制度にアクセスできます。

http://jssti.umin.jp/pdf/cd_bylaw.pdf
日本性感染症学会認定医制度規則

http://jssti.umin.jp/pdf/cm_bylaw.pdf
日本性感染症学会認定士制度規則